

国際共同研究、三つの提案 —概念および概念編成史研究を中心に—

鈴木貞美

国際日本文化研究センター

はじめに

国際日本文化研究センターは、学術の専門化の弊害をのりこえるために、国際性、学際性、総合性を目標にかかげて、発足し、今年で21年目を迎えた。今日、国際的、学際的研究は様ざまなひろがりを見せているが、各国、各分野の研究者がそれぞれの成果を持ち寄り、参照する場を提供するだけのものから、いよいよ、その有効性が問われるようになってきていると思う。それは端的にいえば、国際的・学際的共同研究の成果を各国の各分野に還元したとき、従来の説を更新しうるものになっているか、どうか、ということである。

これまでの経験のなかから、そのような有功性をもつ国際的な共同研究の課題と方法を模索してきたが、2000年前後から、国際集会の場で、機会あるごとに私が提案している三つの共同研究について、その概略をのべてみたい。第一は、「東アジアにおける学芸概念とその編成」。これは、人文科学、社会科学、自然科学の全分野にまたがるもので、とくに東アジアの研究者の共同作業が不可欠だが、中国および韓国の研究者との連携が進展を見せている。第二は、「大日本帝国」の文化史研究。これは近現代の日本文化研究が中心となるが、やはり、とくに東アジアの日本研究者の共同作業が不可欠である。第三は「生命観の探究」。いわゆる文理融合型の共同研究で、地球環境問題が緊急の課題になっている今日、20世紀の学問体系では対応できないという判断から、それを21世紀型に組みなおすために不可欠なものである。本日は、第一と第二を中心にお話する。

東アジアにおける学芸概念とその編成—その共同研究と方法の提案

学芸概念編成史とは何か。学芸は学問と芸術。概念編成史とは、概念の体系ないしは秩序が、歴史的にどのように編みかえられてきたかを解明する研究のことである。これは従来の一国に閉じた、専門化と細分化の進む学術研究に対して、国際的、学際的、総合的な観点から従来の知的システムの編成とそれを支える価値観の反省を行おうというものである。

概念の変化を知らなければ、過去の同じ語に現在の概念を投影して読む誤りは往々に起こる。現在の概念の対立関係による分析スキームを過去に投影して、分析を行う時代錯誤もくりかえされてきた。それゆえ、概念史は、あらゆる学問研究の不可欠な基礎である。

たとえば社会科学の分析概念としての「封建制」は、史的唯物論における「奴隷制—封建制—資本制—社会主義」という発展段階論に立つものである。しかし、中国清代において用いられていた「封建」は、異民族支配のもとで分権制を主張するもので、地方の特色を生かしうる世襲制の主張も行われた。その対立概念は中央集権を意味する「郡県」であった。徳川時代の日本にも、その論議が受け入れられ、「封建」制がよいとされた。異民族支配を受けておらず、その論議の前提となる科

挙制度も採用されておらず、古代から世襲制が定着していたにもかかわらず、である。そして、徳川幕藩体制は、集団の管理権の委託関係によってなりたつものであり、ヨーロッパの“feudalism”とも中国の「封建」制ともまったく異なる特種な二重権力を職分ごとにつくりだすものであった。ところが、人びとを身分制度から解放することを宣言した明治維新後、徳川時代の世襲による職分・身分制度が「封建制」といわるようになった。さらに、日本の1920年代のマルクス主義者たちは、徳川時代を資本制以前の段階という意味で、「封建制」と呼んだ。さらにコミンテルンの1932年テーゼは天皇をいただく統治システムを「(半)封建制」と呼び変えた。同じことばでも、それぞれの立場によって、その意味がまるでちがっていたのである。概念とその価値観とを歴史的に相対化すること、それによって、実態に迫る新たな社会史にむかうことができことは、ここに明らかだろう。

本研究は、しかし、歴史概念の変遷の研究にとどまるものではない。学芸全体におよぶ概念のしくみについての知の共同作業を提案するものである。そして、概念史研究は、ともすれば、ひとつの概念の形成過程を追うことに終始しがちで、その概念のそれぞれの時代の知の全体における相対的な位置の解明がおろそかになりやすい。学芸概念編成史とは、学問の秩序、体系が編みかえられてゆく様子を明らかにする研究である。構造研究と歴史研究との総合である。

たとえば、「純文学」という概念は、夏目漱石『虞美人草』(1908)のなかに、「哲学と純文学とは科が異なるから」と登場する。これは、帝国大学の文科大学(文学部)のうちの二つの科をいっているもので、人文学を意味する広義の「文学」に対して言語芸術を意味する「純文学」である。「美文学」とも言っていた時期もあるが、明治期を通して、多く見られる。つまり、今日いう「純文学」、「大衆文学」に対するそれとはまったく意味がちがう。

1920年代後半に「文壇文学」に対して、勤労大衆のための「大衆文学」が勃興し、この言葉が成立、定着し、同時に、それまで仏教で大勢の僧侶を意味していた「大衆」の語を“mass”の訳語に変えてしまった。しかし、そのとき「大衆文学」に対する語として「純文学」が成立したかという点、そうではなかった。まだ、明治期に育った人びとは、明治期の意味での「純文学」を用いていたからだ。そして、その「大衆文学」は「時代もの」と「探偵小説」とからなり、菊池寛らの「通俗小説」(当代風俗小説)は排除していた。1935年くらいに、「時代小説」「探偵小説」にユーモア小説など「通俗小説」を加えて「大衆文学(小説)」という呼称が安定する。それこのころから、従来の意味とはちがう「純文学」を用いる人びとが出てくるが、その意味は安定せず、今日的な意味で定着するのは第二次大戦後である。ただし、戦後には「純文学」と「大衆文学」とのあいだの「中間小説」という言葉がさかんに用いられるので、厳密には、1961年の「純文学変質論争」を通じて、「純文学」対「大衆文学」のスキームが確立したとすべきである。そして、それは今日、ふたたび不安定なスキームになりつつある。

それゆえ、戦後の意味を投影して明治の「純文学」の意味を理解するのはまったくの誤読であり、明治期から「純文学」対「大衆文学」という観念があったと考えてしまうのも誤りである。徳川時代の「雅」「俗」の区分は、これに似ているように思えるかもしれないが、和文の物語は「雅」、読み本、戯作の類は「俗」、漢詩や和歌が「雅」であるのに対して、芭蕉のこのような俳諧のように、今日、高尚な内容をふくむと判断されても俳諧は「俗」の世界に属した。「雅俗」は文化全般にわたって、

それぞれのジャンルが属する区分が明確であり、それに対して「純文学」「大衆文学」は小説というジャンル内を芸術性、思想性と娯楽性の多寡によって分けようとするものである。つまり分類基準がまったく異なる。

商品として生産された小説の世界を、芸術性ないしは思想性と娯楽性の多寡によって、二分することなど原理的に不可能である。そして、芸術性や思想性をめぐる価値基準も、また娯楽の質も時代によって変化する。ひとつの作品の評価も歴史的に変化する。そこで評価史が必要となる。まして1920代後半からマス・メディアに掲載される作品は、いわゆる「純文学」作家の手になるものでも通俗性を排除することなどありえない。それゆえ、その時期、その時代の価値観による分類、すなわち概念編成の組み換えられてきた歴史を対象化する作業が必要となり、それを行うことは、今日の価値観を投影して書かれてきた文学史の書き換えを促すことになる。いいかえると、概念および概念編成の歴史研究は、これまで分析概念と当代の概念とを混同してなりたってきた研究を覆し、まったく新しい文化史研究をひらくことになる。

東アジア近代における「文学」概念の特殊性

どのような意味にしろ、「純文学」の上位の概念は「文学」である。中国では古来、「文の学」、文章博学を意味した。文章の価値が高くなると「文と学」の意味でも用いられた。日本では徳川時代末まで、中国渡来の学問を意味し、したがって、和歌も物語も、「文学」とは呼ばれたことはない。誤用された例も見つかっていない。

しかし、中国1930年代の「文学革命」に活躍した魯迅は「門外文談」(1935)のなかで、こういつている。われわれの用いている「文学」は『『文学は子游、子夏』からきりとしてきたものではなく、日本から輸入したもの、彼らの英語*literature* に対する訳語なのだ』と。これは、『論語』に発する「文学」の意味が、日本で今日的な意味に変化したことを意味する。だが、日本でも、いきなり、今日的な意味になったわけではない。先に述べたように明治期を通じて一般化した「文学」は、文学部の「文学」、人文学を意味するものだった。

東アジアにおいて古代から近世にわたる学芸の歴史は、ヨーロッパとはまったく異なる編成をもつ中国のそれを基本にしつつも、朝鮮半島と日本において、それぞれ独自に推移してきた。19世紀以前にも西欧の宗教や学術が伝えられはしたが、しかし、その全体の構成が変化するまでにはいたらなかった。しかし、19世紀半ば、上海でキリスト教宣教師と中国人の秀才との協力によって大量の西欧新知識が翻訳され、それが日本にもたらされるやいなや伝統観念の大きな変容、すなわち学芸概念編成の組み換えがはじまった。列強の植民地にされるかもしれないという危機を敏感に感じた日本は、欧米に知識人を派遣し、また欧米諸国から知識人を雇い入れ、学芸の近代化の先陣を切った。英語“*literature*”も例外ではない。

当時の英語“*literature*”の広義は著述一般、中義は洗練された文字による著述、すなわち人文学、狭義は文字による言語芸術を意味した。中国の伝統的「文学」は、この中義に相当するので、英華辞典、華英辞典のなかで、互いに訳語となった。これが日本に受け入れられると、「文学」を学問全般、“*science*”と同義に用いる用法が発生した。幕府公認の朱子学が自然科学をもふくむ体系であり、幕末には陽明学とともに復興していたからだろう。明治中ごろまで、この用例は認められる。しか

し、自然科学と人文学とを切り分ける編成が西周らによって、すでにもたらされており、自然に、「人文学」の範囲に落ち着いたと考えてよい。伝統的な「文学」の内部は「経・史・詩・集」に分類されてきたが、近代的な大学制度において「文学(広義)」部の内部は、紆余曲折を経てのことだが、「哲学・史学・文学(狭義)」へと編成が変えられてゆく。

その狭義の“literature”、言語芸術すなわち詩、小説、戯曲は、ロマンティズムの価値観により、創造的で想像的なものを尊重するものだった。中国の読書階級も虚構の類を娯楽の対象にしたが、伝統的に、嘘を退け、虚構を蔑視する精神が支配的であり、朱子学は、この傾向を推し進めた。それゆえ西欧の狭義の“literature”は受け入れ難く、したがって「文学」の編成替えは起こりにくかったと考えられる。しかし、徳川時代の日本ではちがった。たとえば虚構を通してこそ真実を語りやすいという歌舞伎台本作家、近松門左衛門の考えが民衆文化のなかにかかなりの力をもって展開していた。また、物語・小説をひとつのジャンル史を書こうとするような考えも発生していた。それらによって、狭義の“literature”の受け入れが容易であったと考えられる。このように、伝統的な土台の上に西洋知識を受け入れ、その土台を組み替えることによって近代的な再編成が行われたが、その組みかえには、日本と中国との文化的土壌のちがいと歴史的條件が働き、ちがいが生じたのである。

また欧米諸国の大学はキリスト教の神学部を中心にもつ構成において発展してきたが、日本の大学はそれにあたる学部を設けず、欧米においては神学部が付随する宗教学を文学部哲学科のなかにおいた(大学のこのような学部編成は20世紀前半を通じて中国・韓国にもおよび、今日に至っている)。この制度のちがいは、学問それぞれの内容にも変化をおよぼす。イギリス・フランスにおいて、人文系の学問は、基本的に神学に対して人間についての学問を意味する。しかし、ドイツにおいてプロテスタンティズムは学芸全般に浸透していた。そのドイツの影響を強く受けたために、また儒学が人間に関する学問という性格を強くもっていたために、日本の近代の学芸は宗教と相互浸透して発展してきた。西欧ロマンティズムの学芸は、キリスト教の精神支配に対してギリシアやローマの神話世界、土地の神や風の神、また東洋の神がみを好んでとりあげた。これにならって、日本における学芸のロマンティズムは、東洋や日本の宗教的テーマを好んでとりあげたが、自国の支配的宗教(近代になってつくられた国家神道)との精神的な緊張は生まれず、むしろ積極的に融合するものもあった。

このようにして、明治期の日本において西洋諸国の学芸の編成とは異なる体系が築かれたことは、大学の制度が端的に示している。その体系が20世紀前半を通じて、日本帝国主義とともに台湾や朝鮮半島にもたらされ、また中国の留学生の手によって、大陸に持ちかえられた。そこで、先の魯迅のことは、われわれの「文学」は「『文学は子遊、子夏』からきりとしてきたものではなく、日本から輸入したもの、彼らの英語literature に対する訳語なのだ」ということになったのである。

地球環境が大きな問題となっている今日、21世紀にふさわしい学問体系を築くためには、近代の知のシステム全体の反省が必要だが、同時に東アジア近代の特殊性もよく反省する必要があるだろう。東アジアにおける学芸概念とその編成史の研究を呼びかけているゆえんである。

「大日本帝国」の文化史研究

日本で築かれた近代的な学問のシステムは、日本帝国主義の膨張政策も手つだつて、東アジアに展開したが、実は、この「大日本帝国」の文化史については、まだ資料の掘り起こしの段階にある。それに伴って、進んでいたと思われる政治史にも修正が迫られている。日文研では劉建輝助教授が代表をつとめる「満洲国」についての共同研究が進展している。

とりわけ「満洲国」においては、「民族協和」のスローガンがあげられており、その実際がどうであったかということを中心にして話してみたい。これは1919年、朝鮮半島における三・一運動、中国における五・四運動のふたつの民族独立運動の高揚を受けて、日帝は台湾、朝鮮半島の武断政治を文治政策に転換するを余儀なくされた。また、日本の内地には、第一次大戦後の国際協調や文化相対主義がさかんにになっていたこと、あるいはプロレタリア・インターナショナリズムの機運により、植民地の「異民族」に対する関心も高まっていた。

満洲事変を起こした関東軍は、当初は占領を考えていたが、急遽、独立国として体裁を整えることに変更したといわれる。これに国際連盟における中国民国政府との駆け引きがからんで、執政に清朝・最期の皇帝、溥儀を打据え(のち、1934年に皇帝)、要職に中国人を据え、官僚の中枢を日本人が握り、背後から関東軍がコントロールするという傀儡政権の「国家」を創設し、孫文の唱えた「五族共和」を、「王道楽土、民族協和」に掛けかえた。「満洲国」公用語は、日本語と中国語(「満語」と呼ばれた)、国語は中国語、日本語、ところにより蒙古語、ロシア人居住地区ではロシア語の教育もされた。中国語、ロシア語、ポーランド語の新聞が発行されていたし、日中、日ロの対訳で新聞が発行されてもいる。ロシア正教も活動を続けたし、イスラームにも優遇措置をとり、回族の人口が増加した報告もなされている。2006年のポーランド日本学会の創立大会では、「満洲国」でウィクライナ語辞典の編集に着手されていたことが明らかになり、話題になっているという報告もなされている。ナチスからの亡命ユダヤ人も受け入れた。「満洲国」の承認をめぐる、日本は常任理事国であった国際連盟で孤立し、これを脱退した。ソ連と対峙する「独立国家」建設には、最大限の国際的配慮が必要だったからである。

そして、関東軍は実質的に「独立国」の軍隊となったことにより、いわば日本政府から相対的に独立した「独走」が許されることになった。1933年には華北に侵入、日本の華北分離工作に先鞭をつけたりした。

日中戦争のスローガンは「日本の生命線」をソ連から守ること、その意味で「防共」の一点張りだったが、南京大虐殺に米英をふくめた国際非難がたかまり、また近衛文麿内閣は1938年1月に蒋介石国民党政府との和平工作を打ち切り、戦線の拡大と膠着から、11月に「東亜新秩序」声明を出し、12月に日・華・満の連携をうたう「近衛三原則」を打ち出し、汪精衛南京政府を樹立させる工作に出る。この日・華・満の連携をうたう政策は、46年初夏の「大東亜共栄圏構想」のもとになったものである。これは「満洲国」の「民族協和」のタテマエを国際戦略に展開したものといいよう。

「満洲国」における「民族協和」政策、「満洲国」の多民族を国民化する政策は、日中戦争期には「日満一体化」の方向に進むが、「大東亜戦争」の開戦によって、むしろ多民族主義の方向が強くなってゆく。日本の華北支配の進展にともない、中国人労働者の流入が減少するにつれ、産業労働者として在満中国人をあてに

するしかなくなっていたこと、「大東亜共栄圏」の成否は汪精衛南京政府をはじめとする中国人の動向にかかっているとの判断から、「満洲国」こそ「大東亜共栄圏」の模範でなければならないということがいわれ、中国人の郷村建設に力を入れ、これには中国人側からも賛同するものが出るようになってゆくことなど、かなり変転している。

ところが台湾や朝鮮半島では1939年を前後する時期から、国民総動員体制づくりを行うために、ふたたび武断的な政策に転換し、「皇民化」が強要されてゆく。とりわけ、朝鮮半島においては、公的な場所での母国語の使用を禁止するほどの措置に出ている。これは、「満洲国」とは、ほとんど正反対の政策である。「大東亜共栄圏」構想は、日中戦争の開始期から提起されていたものでなく、日中戦争の行き詰まりを打開するために、「満洲国」の民族協和のスローガンを参照して、いわばご都合主義的にもちだされたものであり、深い内部矛盾をはらんでいた。とうてい東アジアの人びとに共有されうるものではなかった。

中国人にせよ、朝鮮人にせよ、日本人にせよ、その時代に、それぞれの土地で生活していた人びとの言動や作品を分析するには、こうした文化政策の変化を把握することが不可欠である。ロシアには、「満洲国」の文献資料が終戦時にかなり運ばれたことが分かっている。「満洲国」におけるロシア人の生活実態とともに、それらを解明する共同研究を呼びかけるゆえんである。

新たな生命観が問われている

地球上の他の生物とともに人類が生き延びる手立てを打つためには、緊急で暫定的なものにしても、宗教思想と自然科学の対立、宗教間の対立を超えるような新たな「生命観」を探る必要がある。そのために自然科学から社会、人文科学のあらゆる分野を横断しうるテーマとして「生命観の探究」を設定する。「生命観」は、きわめて漠然としており、つきつめて考えられにくい問題であることはたしかで、下手をすると何もかも生命観の問題であるかのように語られてしまう。しかし、「生命」は、神から授けられるのか、自然の根源をなすものか、物質の自己運動によって形づくられるのか、また、生物の基本単位を細胞とするか、遺伝子とするか、そして、人間は万物の霊長なのか、生物の一種にすぎないのか、進化するのか、進化するとしても、その原因は何か、などなど、その根本のところから成り立ちが異なるものが乱舞し、これらが結びついたり、反発しあったりすることによって、さまざまな傾向をつくってきたし、それは現在でも変わらない。それらの成り立ち、結びつきと反発のしくみを解明し、暫定的なものにし、一致点を築くための基礎的研究である。

それらをつきあわせてゆくだけで、各専門分野によって記述されている百科事典レベルの見解にも、相当の訂正がなしうる。そのことをわたしは『生命観の探究―重層する危機のなかで』（作品社、2007）で示した。

これらの研究は、とてもひとりの手でなしうるものではない。各分野の先行研究をよく検討することとともに、全体の作業過程のアウトラインを明確にし、各自が、そのうちのどの項目を受け持っているのかを自覚し、知の共同作業、すなわち研究運動として展開してゆくべきものである。